

資料紹介

富士山宝永噴火絵図 ～ 御厨地方（小山・御殿場）の状況を中心として ～

歴史文化情報センター

はじめに

今回の資料紹介は、平成 23 年度歴史文化情報センターで最も利用申請数の多かった「富士山宝永噴火絵図」を紹介します。この資料は自然災害の恐ろしさをリアルに伝えていますが、それとともに、不可能とも思える災害復興に立向かう当時の人々の姿も見えてきます。

なお、この資料は現在「歴史文化情報センターホームページ」内で公開しています。静岡県立中央図書館・歴史文化情報センターから入っていただき、「県史編さん収集資料の検索へ」をクリック、キーワードに「富士山宝永噴火絵図」と入力しクリックしていただくと、目録並びに詳細画像がご覧いただけます。

宝永地震と宝永噴火

宝永 4(1707)年 10 月 4 日、東海から紀伊半島・四国にかけて巨大地震が襲った。これは江戸時代に起きた、東海・東南海・南海の連動地震である。マグニチュードは 8.4 と推定され、この巨大地震とそれにともなう大津波は、静岡県内にも甚大な被害をもたらした。この宝永地震に連動して、同年 11 月 23 日富士山が大噴火したのである。

「富士山宝永噴火絵図」は、東海道原宿（現沼津市）の書役を務めていた家に代々伝わる資料であり、「昼乃景気」・「夜乃景気」・「焼納り乃景気」の 3 枚が現存している。

今回はそのうちの「昼乃景気」を掲載する。絵図には富士山の南東斜面から噴煙が立ち上る様子が描かれており、絵図の中に記されている文字は〈史料 1〉のとおりである。この絵図は専門の絵師が筆をとり、噴火後の時間経過がわかる貴重な資料である。また『富士本宮浅間社記』には、未曾有の噴火をこの世の終りととらえ、富士山噴火に対する住民のうろたえる様子や心情が詳しく書き残されている。遠く江戸市中にまで降灰をもたらした富士山宝永噴火は、同年 12 月 8 日ようやく終息した。* 1



富士山宝永噴火絵図 「昼乃景気」

△史料1ⅴ

昼乃景気

ほうえいよねんひのといじゅういちがつにじゅうさんにち
宝永四年丁亥十一月廿三日 午ノ上刻ニ地震ユリ

ふじさんかみなりのこと
富士山雷乃如クナリ 焼出^{やきい}デル事如斯^{ことかくのごとし}

みぎにじゅうさんにち
右廿三日ヨリ 十二月八日迄十六日間之間 焼候^{やけそうろう}

ひるのていのごとし
昼乃体如此

このところへやきくも
此所江焼雲ノ内ヨリ石砂下ルコト

たいせいごと
大星ノ如シ 積^つモリテ宝永山トナル

ただじゅういちがつにじゅうさんにち
但シ十一月廿三日ニ斗リ見ル

御厨地方の被害状況

火山の噴火に伴う降灰被害の程度は、一般にはその厚さに関係がある。2 m以上の降灰で植物は完全に枯渇し、1～1.5 mでほとんどの植物を枯らし、20 cmで稲田を破壊、4 cmで小麦・大麦は15～30%の減収被害がでるといわれている。

この爆発とともに噴出した焼け砂は黒雲のようになり、人家・田畑のみならず山野も埋め尽くした。特に火口に近い駿東郡須走村^{すばしり}（小山町須走）では、降下した砂の深さが1丈^{じょう}（約3 m）にも達し、村内75軒のうち73軒が焼失・倒壊という壊滅的な被害を受けている。また火口から東に開けた御厨地方の被害も甚大であった。当該58ヶ村のうち、39ヶ村は砂の堆積が3尺（約90 cm）以上の激甚災害地域となった。御厨地方の農民はこの噴火により生活の糧を失い、幕府から支給される1人につき1日1合の御助米により、かろうじて命をつなぐ状況となった。

噴火から5年後の正徳2（1712）年の駿東郡用沢・棚頭^{たながしら}・阿多野新田^{あだのしんでん}・大御神^{おおみか}・上野^{うえの}・上野新田^{うえのしんでん}・中日向^{なひなた}など7ヶ村の人別帳を見ると、他出した戸数の割合は全体の39%、55%の人口が流失している。また農耕・運搬に使われていた馬も、牧草地の消滅と貧困から88%が売却された。宝永噴火に被災した村々は、まさに村落共同体の解体ともいえる状況に追い込まれたのである。

復興への道程

宝永噴火後、復興の責任者として任命されたのが、関東郡代・伊奈半左衛門忠順^{ただのぶ}である。当初、御厨地方の農民は御助米を要求したが、しだいに砂除金の要求に力点を絞り農村の復興を目指す。生業である農業の復旧には、田畑に積もった砂の除去＝砂除けが何としても必要であった。この要求に対し幕府はあくまで自力での砂除けを命じたが、被災した住民は諦めず幕府と交渉した。その結果、噴火後1年半経ってようやく勘定奉行所役人と伊奈半左衛門が御厨領まで赴き、被災地の全面視察となった。その凄まじい状況を見て、伊奈も御厨地方の復興に本腰を入れるようになる。

酒匂川^{さかわがわ}の底に溜まった砂を除く「相州川筋御普請^{そうしゅうかわすじごふしん}」では、地元足柄の人夫よりも高い賃金が御厨地方の人夫に支払われるよう勘定奉行の荻原重秀^{おぎわらしげひで}に掛合い、また課題であった幕府の砂除金の支払いにも成功する。伊奈半左衛門は被害調査に基づき、毎月御助米や家作料を下付するなど被災地の農村復興を親身になって推進した。

この災害復興の過程で重要であったことが2つある。ひとつは御厨地方の農村の村役人が幕府に直接交渉を繰返し、これが復興の主力となったことである。彼らは、水路の復興計画や砂除堰の開削、それにかかる費用を計算し、酒匂代官に書類を提出し直接交渉を行った。また土木技術にも長じ、復興を目指して自ら行動している。今ひとつは、住民の復興への意欲である。前述のとおり半ば住民は流失するも、踏みとどまった住民は何としても生まれ育った土地で家を維持していきたいという強い執念を持っていた。

この後、御厨地方の稲田に耕作上支障の砂が完全に除去されるまでに約20～30年の歳月を要している。また畑の場合は田より遅れて、砂が完全になくなるのは天明2(1782)年頃のことであり、それは噴火後約70年以上経ってのことであった。村が完全な「亡所」にならなかったのは、御厨地方住民の郷土を愛する心と復興をあきらめない継続した結束力・行動力に負うところが大きかった。

災害復興を指揮した伊奈半左衛門忠順は、漸次成果を上げたが、正徳2(1712)年2月29日事業の半ばにして病没している。巷では窮民救済のため無断で駿府紺屋町代官所の米蔵を開放したために罷免され、切腹したと噂された。伊奈半左衛門により救われた農民たちは慶応3(1867)年に祠を建て、明治11(1878)年には伊奈神社を建立した。今でも毎年4月29日と11月3日に伊奈神社では大祭が挙行され、伊奈半左衛門忠順の遺徳が偲ばれている。

- 〈参考文献〉 『静岡県史 通史編3 近世1』
『静岡県史 別編2 自然災害誌』
『静岡県史 別編3 図説静岡県史』
『小山町史 第二巻』
『富士本宮浅間社記』
『怒る富士』上・下巻 新田次郎著

- 〈註〉 * 1 富士山宝永噴火の詳しい内容は、静岡県立中央図書館・歴史文化情報センターHP [授業の種「元禄・宝永・安政地震と富士山宝永噴火」](#)でご覧いただけます。